

# Revitalization of a rural depopulated area: From information to transmit to information to immerse

Toshio Sugiman

Graduate School of Human and Environmental Studies  
Kyoto University

Yoshida-nihonmatsu-cho, Sakyo-ku, Kyoto 606-8501, JAPAN  
sugiman@toshio.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

## Abstract

Viewed not from natural science that analyzes a human as animal but from the human science that elucidates a human as existence to live life, the concepts of information and communication need to be re-examined. First, whereas the information theory conceptualizes information as input to a head (mind) that is to be processed there, such conceptualization should be denied. Instead, the construction of meanings by a collectivity should be underlined. We might say information processing by a collectivity. Second, the concept of communication as information transmission between individuals has to be abandoned and a new concept has to be invented. The paper proposes two types of communication: 1) rudimentary communication such that person A senses something at the place of person B, and vice versa (A melts with B); 2) the construction of "the third body (a transcendental body)" through the process of melting bodies. The paper then reports, as an illustration, a case study concerning a rural depopulated area in Tottori prefecture in Japan that has been vigorously revitalized since 1984.

## Keywords

revitalization of community, social norm, rural depopulated area

---

## 過疎地域の活性化 -- 伝える情報から浸る情報へ

杉万俊夫

京都大学大学院人間・環境学研究科

## 要旨

生物としての人間を解明する自然科学ではなく、人生を生きる存在としての人間を考究する人間科学の立場に立つとき、情報、あるいは、コミュニケーションという概念にも大きな再考が必要になる。第1に、頭の中(心の中)に情報が入力され、頭の中(心の中)で情報が処理されるという情報概念は否定され、集合体による意味構成、強いて言えば、集合体による情報処理が重視される。第2に、個人間情報伝達という意味でのコミュニケーション概念は否定され、新しいコミュニケーション概念、すなわち、原初的なコミュニケーション(「AがBにおいて何かを感受する、そして、その逆もしかり」というコミュニケーション、言い換えれば、AとBの溶け合い)および、溶け合いを通じた「第三の身体」(超越的身体)の擬制、という2種類のコミュニケーション概念が提起される。本発表では、新しいコミュニケーション概念の実例として、鳥取県のある過疎地域で1984年以来進行しつつある地域活性化の事例を紹介した。

## キーワード

地域活性化、社会規範、過疎地域

## 1. 情報とコミュニケーション

生物としての人間を解明する自然科学ではなく、人生を生きる存在としての人間を考究する人間科学の立場に立つとき、情報、あるいは、コミュニケーションという概念にも大きな再考が必要になる。

第1に、頭の中(心の中)に情報が入力され、頭の中(心の中)で情報が処理されるという情報概念は否定される。われわれに現前する世界は、すべて、「意味」的世界であり、意味は、何らかの集合体(人間とその環境からなる集合体)によって構成される。われわれが意味的「認識」をなすのも、意味的「行為」をなすのも、ことごとく、われわれが、何らかの集合体の動きの一部となっているからに他ならない。あえて、主体という言葉を用いるならば、認識・行為の主体は、頭の中(心の中)で思考・判断する個人ではなく、意味を構成する集合体である(廣松, 1982, 1993; 楽学舎, 2000)。

第2に、個人間の情報伝達という意味でのコミュニケーション概念にも再考が必要である。AがBに情報を伝達するという事態はありえない。強いて言えば、「AとB」が「BとA」に情報を伝達しているのだ。大別して、人間のコミュニケーションには2種類ある(大澤, 1990; 楽学舎, 2000)。一つは、原初的なコミュニケーションであり、「AがBにおいて何かを感受する、そして、その逆もしかり」というコミュニケーションである。その場合、当該の感受に関する限り、AとBの差異はなくなり、「AがBであり、BがAである」という事態、すなわち、「AとBが溶け合う」事態が生じている。

「溶け合うAとB」の経験が十分な強度を有するとき、その経験は、A(ないしB)のいずれでもない「第三の身体」、すなわち、両者を代表する「第三の身体」に帰属される経験となる。この「第三の身体」に帰属されるものこそ、「意味」である。A(ないしB)が、その「第三の身体」の作用圏にあるとき(いわば、「第三の身体」の声を聞くととき)、A(ないしB)にとっての意味的世界が可能となる。こうして、A(ないしB)は、当該の「第三の身体」の作用圏、あるいは、当該の意味的世界に浸る身体となる。

二つ目の種類のコミュニケーションとは、ある「第三の身体」の作用が、それまで作用圏の外にあった身体にも及ぶようになるプロセスである。「第三の身体」の作用圏の拡大プロセスと言ってもよい。このプロセスは一方的である。なぜならば、ある「意味」が有効な身体(当該の「意味」に対応する「第三の身体」の作用圏にある身体)から、その「意味」が無効な身体への伝達だからである。--- 何らかの「意味」を共通理解とした「交換(等価・不等価交換)」とは違う。

この伝達が首尾よく遂行されたならば、伝達した側にも伝達された側にも変化が生じる。伝達した側においては、従前からの「意味」が、伝達された側の特殊状況にも当てはまるまでに一般化される。伝達された

側においては、今までの認識や行為の一部が、伝達された「意味」によって補足されるようになる。--- かりに、行為の物理的様態が変わらずとも、その意味が変化する。伝達する側が規模的に小さな集合体であり、伝達される側が規模的に大きな集合体の場合、伝達プロセスの成立によって大きな社会変化が生じうる。

以下、その実例を示すことにしよう。それは、鳥取県のある過疎地域で1984年以来進行しつつある地域活性化の事例である(杉万, 2000; 岡田・杉万・平塚・河原, 2000)。

## 2. 智頭町活性化運動の事例

### (1) 活性化運動の背景

鳥取県智頭町は、典型的な中山間地の過疎地域である。鳥取県の東南部に位置し、西と南は岡山県に隣接する。周囲は1000m級の中国山地の山々が連なり、その山峡を縫って流れる川が智頭で合流し、千代川(せんだいがわ)となり日本海に注いでいる。面積は224.61km<sup>2</sup>、その約93%を山林が占める。江戸時代から杉の植林が盛んであった

しかし、1960年(昭和35年)代に著しく進行した農山村から都市への人口流出に加え、折からの林業不況も重なり、町の活力は著しく低下していった。この結果、1955年(昭和30年)には、14,643人あった町の人口は、2000年(平成12年)8月1日には、9,744人に減少。高齢化率も約28.1%と全国平均を大きく上回る。

なお、智頭町は、1914年(大正3年)に町制を施行し、1935年(昭和10年)山形(やまがた)、那岐(なぎ)、土師(はじ)と合併し、さらに翌11年には富沢(とみざわ)、1954年(昭和29年)に山郷(やまさと)の旧村を合併し、現在に至っている。それらの旧町村は現在でも6つの地区として、なごりをとどめている。各地区には、大体10から25くらいの集落があり、一つの集落は数10戸の世帯からなっている。1つの集落の家々は、軒を並べて、あるいは、1つの明らかなまとまりをもって並んでいる。それは、昔ながらの村落共同体を想像させる風景である。智頭町には89の集落がある。

従来、集落は、文字どおり、1つの共同体として機能してきた。道、田、畑、山林等の維持・管理や、祭り、結婚式、葬儀などは、集落総出で行われた。それは、総事(そうごと)と呼ばれた。そこには、単に、村人総出で作業をするというだけでなく、日々の生活を営む上で欠くことのできない集落の存在、住民が一体感を分かち合える集落の存在があった。

しかし、戦後の経済成長の過程で、集落は、村落共同体としての性格を失っていった。過疎化が進行する中で、集落に住み続ける人々も、近郊都市(智頭の場合は、約40kmの距離にある鳥取市)や町の中心部に通勤するようになり、いわゆる兼業農家が増えた。今や、集落は、所得を得る場としても、また、人間関係を得る場としても、以前のような重みを持たなくなった。確かに、現在でも、いくつかの総事は続いている。し

かし、その総事は、副次的な地位に格下げされた集落の総事に過ぎない。昔ながらの「一軒一人役」(各世帯から1人が総事に参加しなければならないとするルール)も、その義務感だけが重くのしかかる。

## (2) 活性化運動の経緯

智頭町の活性化運動は、前橋登志行(まえばしとしゆき)(当時48歳、製材所経営)と寺谷篤(てらたにあつし)(当時36歳、特定郵便局長)という持ち味を異にする2人の偶然の出会い(1984年(昭和59年))に始まる。まず、2人の出会いに簡単に触れておこう。

前橋と寺谷の偶然の出会いは、智頭町山形地区が鳥取国体(わかとり国体、1985年)の空手会場に選ばれ、智頭町全体が一種独特の興奮に包まれる中でのことだった。当時、地区公民館長であった前橋は、国体参加選手および観戦者への土産品として、智頭町の名産品である杉の間伐材を利用した写真たてを製作中であり、他方、寺谷は、郵便局業務改革の一環として、杉板葉書の製作、商品化を企画中であった。2人の出会いは、寺谷が杉板はがきの制作業者を求めて、前橋宅を訪問した時から始まる。初めて出合ってから1週間ほど、寺谷は、仕事そっちのけで連日、前橋宅を訪れ、2人は自らの人生や智頭町の現状と未来について語り合った。その語りのなかから、ごく一握りの資産家や有力者に牛耳られるまま、新しい試みのいっさいを拒絶する旧態依然たる地域の体質に対する不満、そして、この体質を何とか打破しなければならないという熱い思いを共有していった。

1985年(昭和60年)には、2人は杉名刺の開発に乗り出した。また、杉名刺に続いて、杉の香りはがきを開発・商品化した。1986年(昭和61年)には、同じ杉を利用した木のはがき、木づくり絵本などの商品を送り出した。前橋と寺谷、および、2人に協力する少数の人たちは、1987年(昭和62年)から89年(平成元年)の3年間、「木づくり遊便」コンテストや智頭杉「日本の家」設計コンテスト、そして「杉の木村」ログハウス群建設など智頭杉の高付加価値化を軸とするイベントや事業を次々に実現していった。

そのような中、1988年(昭和63年)、前橋と寺谷を中心とする、約30名が「智頭町活性化プロジェクト集団(Chizu Creative Project Team:略称CCPT)」を結成した。「杉の木村」ログハウス群建設以降のCCPTの活動は、そのウエイトを物づくりから人づくりへと移行させた。とりわけ、異文化や学問・科学とのふれあいによる人づくりが精力的に行われた。

以上のような約10年間にわたる活性化運動の実績は、かなり広範な人々の認めるところとなった。その後、CCPTは、あたかも変幻自在の軟体動物のように、地域コミュニティのひだのなかにしみ込み、そして、岩をもうがって伸びる木の根のように、縦割り行政システムの壁を突き崩し、そのなかに浸透していった。町行政へと浸透するなかで、「ひまわりシステム」(郵便配達職員が、役場、病院・医院、農協などの協力を得て、

独居老人に在宅福祉サービスを提供するシステム)が誕生した。

町行政を突き動かす形で始まった、もう一つの運動が「ゼロ分のイチ村おこし運動」である。この運動は、集落ごとに、従来の保守性・閉鎖性・有力者支配を打破し、住民自治を育もうとするものである。「ゼロ分のイチ」とは、ゼロ(無)からイチ(最初の有)を創造する、いわば無限の跳躍を指す言葉である。その運動は、1996年を助走期として、1997年に本格的にスタート。現在、6年目に入っている。1997年度には、市瀬(いちのせ)、白坪(しろつぼ)、新田(しんでん)、中田(なかた)、波多(はた)、早瀬(はやせ)、本折(もとおり)の7集落が10年間という長丁場の運動に着手した。さらに、1998年度には、五月田(ごがつでん)、中原(なかばら)の2集落、1999年度には、上町(かんまち)の1集落、2000年度には、芦津(あしづ)、岩神(いわがみ)、奥西宇塚(おくにしうづか)、早野(わさの)の4集落が新たに立ち上がった。こうして、現在までに智頭町にある89集落のうち、14集落がこの運動に立ち上がっている。来るべき住民自治の時代を見すえた、壮大な社会システムの構築が、山間の地、智頭で進行しつつある。

## 3. 智頭町活性化運動におけるコミュニケーション

智頭町における地域活性化運動を、冒頭に述べた「コミュニケーション」概念を用いて考察してみよう。

第1に、この運動のリーダーとなる前橋、寺谷の出会いの中に、「溶け合う身体」による原初的コミュニケーションと、そこからの「第三の身体」の成立を見ることができる。前述のとおり、「初めて出合ってから1週間ほど、寺谷は、仕事そっちのけで連日、前橋宅を訪れ、2人は自らの人生や智頭町の現状と未来について語り合った。」また、上には述べなかったが、二人が出会ってから約10年間、一日もかかさず電話で会話をかわし、日々の事態の推移を共有し、明日の動き方を相談している。出会った当初の熱っぽい対話、また、電話を含めてのその後の濃密な対話は、まさに二人を文字どおり一体(溶け合う状態)にしただろう。そして、その原初的コミュニケーションを通じて、「智頭で生きる」ことについての「意味」が問い直され、新しい意味---保守性、閉鎖性、有力者支配の打破を志向する地域活性化をめぐる新しい「意味」---が形成されただろう。それは、二人のいずれのみにも帰属しえない(しかし、溶け合う二人を代表する)小さな「第三の身体」の擬制であった。

第2に、二人を作用圏とする小さな「第三の身体」、しかし、二人によって十分に擬制された「第三の身体」は、約30名の仲間に対して一方的に伝達されていく。その結果が「智頭町活性化プロジェクト集団(CCPT)」の結成である。しかし、CCPT結成当初は、CCPTという集合体を作用圏とする「第三の身体」は、必ずしも頑健ではなかった。CCPTを作用圏とする「第三の身体」

は、智頭町民のほぼ全部を作用圏とする伝統的な「第三の身体」に比べれば、あまりにも弱かったのだ。実際、前橋、寺谷のリーダーは、CCPT結束後も、しばらくの間はメンバーリストの公表に慎重だった。とりわけ、若年メンバーや、財力のない家系のメンバーには、有力者や一般町民の攻撃が集中する危険性 --- 伝統的な「第三の身体」からの一方的伝達がなされてしまい、その結果として、CCPTを作用圏とする「第三の身体」が崩壊する可能性 --- が高かった。メンバーリストの公表は、CCPTを作用圏とする「第三の身体」が頑健となり、一般住民や行政（町役場）への一方的伝達を開始したころ、実行された。

第3に、活性化運動が始まって約10年が経過した頃から、CCPTを作用圏とする「第三の身体」は、行政（町役場や郵便局）へと伝達されていった。「ひまわりシステム」や「ゼロ分のイチ村おこし運動」は、その結実である。行政は、伝統的に、智頭町内にある89の集落や一般住民と強いつながりを有している。したがって、CCPTから行政へと伝達された「第三の身体」は、各集落や一般住民にも伝達されていく。

ここまで伝達の連鎖が長くなると、「一方的伝達」の特徴がはっきり現れる。前にも述べたように、交換とは異なり、一方的伝達は、伝達する側と伝達される側の間に、当該の「意味」 --- その「意味」の声を発する「第三の身体」 --- が共有されていないところに生じる。つまり、伝達する側は、何の見返りも期待することなく、また、伝達される側は、何の返礼もなすことなく、伝達がなされるのである。現在、「ひまわりシステム」で高齢者世帯を訪ねる郵便局員も、そのサービスを受ける高齢者も、CCPTや前橋、寺谷のことは知らない。また、現在、「ゼロ分のイチ村おこし運動」に取り組む集落の住民の中にも、CCPTや二人の名前を知るものはほとんどいない。

#### 4. 結語に代えて

智頭町における活性化運動の特徴の一つは、それが、研究者との協同的实践として展開されてきたことである。したがって、上に述べた「コミュニケーション」は、CCPT、とりわけ二人のリーダーとわれわれ研究者の間でもなされてきた。筆者自身、智頭町の活性化運動と関わりをもってから、すでに10年以上の月日が経つ。思い返せば、彼らと溶け合うような時間をたびたび経験してきた。そこから、われわれ研究者だけでは思いつきもしなかった新しい「意味」を手にもできた。また、あるときは、現地で悪戦苦闘する人間にしかつかめない「意味」が、二人のリーダーからわれわれに伝達された。同時に、何とか自らの概念や理論を現場で鍛えたいと願うわれわれから、二人のリーダーやCCPTのメンバーに「意味」が伝達され、それが、活性化運動のエネルギーにもなった。本研究は、研究者と（フィールドの）当事者が同じ土俵の上で共同的实践を展開し、その中から知識を紡ぎ出し、共同

で知識を発信していくという学問のあり方（自然科学とは異なる科学、すなわち、人間科学）を構想するきっかけともなった。

#### 引用文献

- 廣松 渉 1982・1993 存在と意味（第1巻・第2巻）岩波書店。  
 岡田憲夫・杉万俊夫・平塚伸治・河原利和 2000 地域からの挑戦：鳥取県・智頭町の「くに」おこし 岩波ブックレット。  
 大澤真幸 1990 身体の比較社会学 勁草書房。  
 楽学舎 2000 看護のための人間科学を求めて ナカニシヤ出版。  
 杉万俊夫 2000 フィールドワーク人間科学：よみがえるコミュニティ ミネルヴァ書房。